

# 日本型多文化教育の枠組みに関する一考察

法政大学キャリアデザイン学部 教授 松尾 知明

2018年の入管法改定を契機に「移民時代」を迎えた日本では、多文化共生の課題は新たな段階を迎えている。これまでは、対処療法的に外国につながる子どもの受け入れや日本語教育が整備されてきたが、日本社会の多文化化がいつそう進むなかで、外国人児童生徒教育から本格的な多文化教育への転換を図ることが求められている。

筆者はこれまで、多文化教育とカリキュラムを対象に研究を進めてきた。多文化教育に関しては、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）を中心に諸外国における動向を把握する（松尾 2007, 2013a, 2017）とともに、多文化共生と教育のあり方について考察を進めてきた（松尾 2011, 2020）。カリキュラムについては、諸外国の教育改革を明らかにしたり（松尾 2010, 2015）、資質能力を育む学びのデザインについて追究したりしてきた（松尾 2016, 2018）。さらにこれらの研究を総合して、日本における多文化教育の構築に関する研究について検討を進めてきた（松尾 2013b, 2021）。では、「日本型多文化教育」（松尾 2023）とは、どのような基本的な枠組みをもつのだろうか、また、このような日本型多文化教育の整理からこれからの日本の教育にどのような提案ができるのだろうか。

小論の目的は、「日本人性」の問い直しという観点から構想した日本型多文化教育について、その骨格をできるだけ簡潔に整理するとともに、日本の教育への提案という形で問題提起をすることにある。そのために、1. なぜ、今、日本型多文化教育なのか、2. 日本型多文化教育の理念と中

心的な課題とは、3. 日本型多文化教育の枠組みとは、4. 多文化共生を実現していくプロセスをどう考えるか、といった問いに答える形で検討したい。本稿は、日本社会の多文化化が進むなかで、日本型多文化教育の導入を通して、だれもがおりのままに生きられる多文化共生社会を実現するプロセスについて具体的に提案するという点で意義をもつと考える。

## 1 なぜ、今、日本型多文化教育なのか？

それは、今、日本型多文化教育の導入を図る絶好のタイミングだからである。

日本は人口減少社会となり、少子高齢化が進むなかで人手不足が深刻になっている。こうした労働力不足に対応して、2018年12月に、外国人労働者の受け入れを拡大するための法改正が行われた。人材不足の分野の労働力を確保するという目的で、新たな在留資格として「特定技能」が創設された。同法の改定に伴い、今後いつそうの外国人の増加が見込まれる状況を考えると、政府は移民という言葉を使いたがらないが、実質的には移民時代が到来したものといえるだろう。

1989年の入管法の改正以降、日本語を話すことのできない外国につながる子どもが日本の学校に流入するようになった。これらの日本語能力の限られている子どものニーズに応じて、日本語教育や受け入れ体制の充実が図られてきた。平成の初めにはじまるこうした対処療法的な教育政策の時期を、外国につながる子どもの教育をめぐる第

1 ステージと捉えたい。

第1ステージでは、教育現場からの声に応じて、外国につながる子どもに対して日本語教育や学校への受け入れの方策が少しずつ整備されてきた。しかしながら、これらの教育政策は基本的な理念や理論を欠く傾向にあり、学習言語を視野に入れた日本語指導の展開、学力や進路の保障、不就学の解消、エビデンスに基づく制度設計など残された課題も多い。

ここでは、2018年の入管法の改定と令和の始まりを、多様性と教育をめぐる第2ステージとして捉えることを提案することにした。それは、日本社会の多文化化が進む移民時代の到来を迎え、対症療法的な付け焼刃の対応から、より広い視野に立った教育の基本理念と包括的な枠組みの構想への展開である。すなわち、移民時代を迎えた第2ステージにおいて、外国につながる子どもを対象とする外国人児童生徒教育から、すべての子どもを対象とする日本型多文化教育への転換を図ることを提唱したい。

## 2 日本型多文化教育の理念と中心的な課題とは

ここでは、日本型多文化教育でめざされる多文化主義の理念とはどのようなものか、中心的課題としてなぜ日本人性（日本人であること）を問うのかについて検討したい。

### (1) めざされる多文化主義の理念

日本型多文化教育を構想するにあたってまず、それを支える理念として、違いを認め尊重する「多文化主義 (multiculturalism)」を検討する必要があるだろう。

多文化主義の概念は、多義的で論争的な言葉である。確定し合意された定義があるというよりは、その概念はつねに変化しながら形成され続けているものといえる。多文化主義をどう考えるかは、社会的な文脈、政治的な立場、時代的な推移によって大きく異なるものである。

多文化主義は、時代の流れとともに、さまざまな形で議論されてきた。ここでは、3つの多文化主義について簡潔に触れておきたい（例えば、塩原 2012）。

まず、1970年代になり、リベラルな多文化主義が政策として欧米諸国で広がっていった。それにより、エスニックマイノリティへの福祉政策が進み、多様性の認知が促されることになる。その一方で、マジョリティとマイノリティの力関係があるため、主流集団を中心とする国家統合にマイノリティが取り込まれることになり、多文化主義が、多様性をコントロールするマネジメントの道具へと変質していったのである。

また、近年、新自由主義の考えが広がるなかで、国家に有益な多様性のみが尊重されるコーポレート多文化主義が進んでいった。能力のあるグローバル人材を得るために多くの国で入国管理にポイント制度が導入され、有能なエスニックマイノリティの獲得を目的に、多様性を受け入れる環境も整えられるようになった。一方で、多文化主義は功利的なものとなり、役に立たないマイノリティは切り捨てられるものへと変質していったのである。

これらの多文化主義の批判として、マジョリティ・マイノリティによる不平等な社会構造の変革をめざす批判的多文化主義が議論されてきた。それは、白人といったマジョリティ性を問題にし、文化には本質的な実体があるとする文化本質主義の文化観を排除し、また、異なる集団間の対話を重んじるものとして展開している。こうした批判的多文化主義の特徴については、本稿では「ジャズ」をメタファーに考えることにしたい (Ladson-Billings 2003)。ジャズは、混成、即興、協働、伝統、永遠の変化、絶え間ない発見など、さまざまな音楽の要素がダイナミックに演奏というパフォーマンスの場において出会い、新たな絶妙の混成としてのまとまりを絶え間なく生み出していく音楽である。このようなジャズとしてイメージされる批判的多文化主義は、①プロダクトからプロセスへ、②静的から動的へ、③純粋から混成へ、

- ④政治的に中立から力関係のポリティックスへ、  
 ⑤理解から変革へと、従来とは異なる特徴をもつものとして捉えることにしたい（詳細は、松尾2023を参照）。

日本型多文化教育においては、ジャズとしての批判的多文化主義をその基本理念として設定することにする。

## （2）マジョリティの意識改革の必要性

批判的多文化主義の基本理念の下で多文化共生を実現していくためには、日本人というマジョリティ性を問うことが中心的な課題になると思われる。

多様性といえばエスニックマイノリティを意味しており、偏見や差別といった問題は、エスニックマイノリティが解決すべき問題として一般に捉えられていた。それが、1990年代のアメリカにおいて、人種関係を問うキー概念として、白人の社会的意味を問題にする「白人性（whiteness）」が注目されるようになった。それまで語られてこなかった白人を対象とし、そのマジョリティ性を検討することによって、①人種主義における隠されてきた中心を問う視点が得られ、②人種主義をすべての人に関わる問題として扱うことを可能にし、また、③白人性を脱構築し、人種的に平等で公正な社会へと変革していく視点を得ることになったのである。

このような動向を踏まえ、筆者はアメリカにおける白人性研究の議論を日本の文脈に援用して、日本社会においてマジョリティを形成している日本人を対象として、「日本人性（Japaneseness）」の概念を提案してきた。日本人性とは、白人性の定義に従い（Frankenberg 1993）、日本人／非日本人の差異のポリティックスによって形成されるもので、目に見えない文化実践、自己・他者・社会をみる見方、構造的な特権から構成されるものと考えられることとする。

日本人性は、マジョリティとしての日本人にとってはふつうで、あたりまえのことである。日本人であることは、空気のようなもので、確かに

あるにもかかわらず、意識にのぼることはほとんどない。しかしながら、日本人であることは、見えない文化実践、日本人としての自分、他者、社会をみる見方・考え方、構造的な特権といったマジョリティ性を形成しており、日本人の日々の生活のなかで社会の規範、標準、基準、常識、価値、優位な立場として生きられているのである。

一方、典型的な日本人に当てはまらないマイノリティは、マジョリティによってほとんど認識されることはない。そのため、ふつう・あたりまえといったマジョリティの文化実践、もの見方や考え方が、当然のこととしてマイノリティにも適用されることになる。このことは、マイノリティの生きづらさを生み、社会的な包摂を阻んでいる一因となっているのである。ここでは、そうしたマイノリティの自由を制限する状況を表すものとして「ガラスの箱」という言葉を提案することにした。マジョリティのまなざしや社会の常識、文化実践によってつくられた透明な箱は、マイノリティにとって越えることのできない可視化されない壁となって立ちばだかっているのである。

日本型多文化教育においては、マジョリティとしての日本人の意識改革を促し、日本人性によって形成されている「ガラスの箱」を見える化するとともに、すべての社会の構成員の居場所をつくり、多文化共生を実現していくことが中心的な課題となるといえる。

提案1. 移民時代の到来（第2ステージ）という絶好のタイミングに、日本型多文化教育の導入を図る。

提案2. ジャズをメタファーとした批判的多文化主義を基本理念とする。

提案3. 日本人性を問い直すことで、多文化共生の実現をめざしていくことが中心的な課題となる。

## 3 日本型多文化教育の枠組みとは

では、日本型多文化教育とは、どのようなものなのだろうか。日本型多文化教育の基本的な枠組

みの全体像は、以下の枠に示す通りである。ここでは、日本型多文化教育の理念、目的、目標や内容、カリキュラム、授業づくりなどについて検討する。

イメージされる批判的多文化主義とする。その基本的な立場としては、多文化教育でこれまで主張されてきたことを踏襲して、①多文化教育はすべての子どものための教育である、②多文化教育が多文化社会の市民の育成をめざす、③多文化教育が学校全体の改革をめざす、ものと考えたい（例えば、Banks 1994）。

### (1) 日本型多文化教育の基本的な枠組み

日本型多文化教育の基本理念は、ジャズとして

#### 日本型多文化教育の枠組み

- ・理念：批判的多文化主義：ジャズ
- ・基本的な立場
  - (1) 多文化教育はすべての子どものための教育である
  - (2) 多文化教育が多文化社会の市民の育成をめざす
  - (3) 多文化教育が学校全体の改革をめざす
- ・育成が求められる資質能力（異文化間能力）
  - (1) 日本人性に気づき理解し、自分自身が変わろうとする力
  - (2) 文化的な差異の理解に心がけ、マイノリティの声に耳を傾ける力
  - (3) 多文化共生社会を他者と協働して築いていこうとする力
- ・異文化間能力の構成要素
 

	構成要素		
知識	自文化	他文化	社会・世界
スキル	批判的思考	コミュニケーション	傾聴
態度	思慮深さ	寛容・共感	主体的参画
- ・多文化教育の3つの目的
  - (1) 社会的な平等：学力をつける
  - (2) 文化的な平等：多様性を伸張する
  - (3) 多文化市民の育成：多文化社会で生きる力（コンピテンシー）を培う
- ・内容
 

(1) 社会的平等	(2) 文化的平等	(3) 多文化社会で生きる力の育成
i. 特別なニーズへの対応 ii. 教師の期待 iii. 多文化のカリキュラム iv. 学習スタイルと教授スタイル v. 学校文化を含めた学校改革	i. 自文化の学習 ii. 継承語の学習	i. 多文化のカリキュラム ii. 偏見や差別の軽減 iii. 異文化間コミュニケーション力 iv. 社会的行動力の育成
- ・多文化共生へのプロセス
 

日本型多文化教育の類型	
1. マジョリティ性の気づきと理解 (1)多文化社会の理解 (2)マジョリティ性の理解 2. マイノリティの物語の発掘 (1)多様な物語の掘り起こし (2)文化的障壁の解明	社会認識を育てる
3. 新しい日本の物語の再構築 (1)バリアフリー (2)ユニバーサルデザイン	問題解決力を育てる

日本型多文化教育で育成がめざされる資質・能力（異文化間能力）については、①日本人性に気づき理解し、自分自身が変わろうとする力、②文化的な差異の理解に心がけ、他者（マイノリティ）の声に耳を傾ける力、③多文化共生社会を他者と協働して築いていこうとする力の3つとしたい。また、異文化間能力の構成要素として、知識（自文化、他文化、社会・世界）、スキル（批判的思考、コミュニケーション、傾聴）、態度（思慮深さ、寛容・共感、主体的参画）を設定する。

日本型多文化教育の目的としては、（1）社会的な平等：学力をつける、（2）文化的な平等：多様性を伸張する、（3）多文化市民の育成：多文化社会で生きる力（コンピテンシー）を培うの3つとする。

これらの理念や目標に対応させて、日本型多文化教育の内容を、①社会的平等（i. 特別なニーズへの対応、ii. 教師の期待、iii. 多文化のカリキュラム、iv. 学習スタイルと教授スタイル、v. 学校の文化を含めた学校改革）、②文化的平等（i. 自文化の学習、ii. 継承語の学習）、③多文化社会で生きる力の育成（i. 多文化のカリキュラム、ii. 偏見や差別の軽減、iii. 異文化間コミュニケーション力、iv. 社会的行動力の育成）と整理する。

また、多文化共生へのプロセスとして、多文化社会についての理解を深め、マジョリティ性を知る①マジョリティ性への気づきと理解、多文化の掘り起こしや文化的障壁を明らかにする②マイノリティの物語の発掘、バリアフリーからユニバーサルデザインに展開する③新しい日本の物語の再構築を考えたい。

## （2）日本型多文化教育のカリキュラム

日本型多文化教育のカリキュラムのデザインについては、3つのレベルがある。カリキュラムフレームワークレベル、学校・教育プログラムレベル、授業レベルである。

### ①カリキュラムフレームワーク

第一に、日本型多文化教育のカリキュラムを構想する際に、全体の枠組みとなるカリキュラムフ

レームワークを作成することにした。

日本型多文化教育のカリキュラムフレームワークをつくる手順は、1）異文化間能力の定義、2）構成要素（知識、スキル、態度）の同定、3）日本型多文化教育の目標と内容の設定、4）ルーブリックの作成である。

具体的にはまず、多文化社会に求められる資質能力としての異文化間能力を定義する。本稿では、日本人性に焦点をあてて、「異文化間能力とは、自らの日本人性について意識化し内省的にその社会的意味を検討するとともに、異なる人々を理解・尊重して効果的にコミュニケーションをとり、多文化共生の実現に向けて協働する力をいう」と定義する。

次に、異文化間能力の構成要素を先行研究に従い、知識、スキル、態度の項目で整理する。小論では、知識（自文化、他文化、社会・世界）、スキル（批判的思考、コミュニケーション、傾聴）、態度（思慮深さ、寛容・共感、主体的参画）とした。

これらの定義や構成要素をもとに、日本型多文化教育の目標と内容、そして、評価指針であるルーブリックを具体化する。目標、内容、ルーブリックの詳細については、松尾（2023）を参照されたい。

### ②学校・教育プログラムのレベルのカリキュラムデザイン

第二に、学校・教育プログラムレベルにおけるカリキュラムをデザインする。前述のカリキュラムフレームワークを踏まえて、学校や教育プログラムの目標や内容を地域や学習者の特性や文脈に対応させて具体化していく。作成する手順については、1）目標の設定と共通理解、2）カリキュラムのデザイン、3）条件整備のデザイン、4）カリキュラムの評価と改善（マネジメント）とする。学校や教育プログラムでめざす目標を設定して、共通理解を図り、それを要としてカリキュラムと条件整備のデザインを行い、実際にそのプランを実行して、PDCAのサイクルを回し、不断

の改善を行っていくのである。

### ③授業のレベルのカリキュラムデザイン

第三に、授業レベルのカリキュラムをデザインする。学校や教育プログラムのカリキュラムを踏まえ、対象となる学習者にどのような異文化間能力を育みたいのかを思い描き、内容のひとまとまりである単元レベルで授業を構想していく。作成の手順は、1) 学習者の実態を把握する、2) 単元の目標を設定する、3) 教材を選択・開発する、4) 学習活動を組織する、とする。学習者の実態を捉え、育成がめざれる資質能力の視点から学校や教育プログラムをもとに単元の目標を設定し、目標を達成した学習者像をイメージしながら、そのようなパフォーマンスが実現できるにはどのような学びの経験が必要なのかを考えて、学習活動をデザインして授業実践を行っていくのである。

## (3) 日本型多文化教育の授業づくり

日本型多文化教育の授業づくりについては、多文化でグローバルなパースペクティブの育成をめざし、社会認識と問題発見解決能力を育てることを目的に、そうした学びを実現するための授業づくりのポイントを示すことにする。

### ①同心円的から多文化でグローバルなパースペクティブへ

授業づくりのアプローチとしては、同心円的なパースペクティブを克服し、多文化でグローバルなパースペクティブを育てる方向で授業づくりを進めていく(加藤 1992)。別の言い方をすれば、自民族中心主義的な見方を脱中心化し、文化を横断的に捉えるクロスカルチュラルな見方や鳥瞰して全体像を捉える俯瞰的な見方を育てていくのである。

### ②社会認識と問題発見解決能力の育成

そうしたパースペクティブには、2つの側面が考えられる。それらは、現状を知る「社会認識」と現状を変革する「問題発見解決能力」である。ここでは、社会科教育の地理、歴史、公民の考え

方を援用して考える。

X軸に空間軸、Y軸に時間軸を描いてみると、私たちの現在のありようは、空間的な広がりや時間を横軸とし、過去、現在、未来の時間の流れを縦軸とすると、それらの軸が交差する点に位置づけることができる。

このように位置づけられる現在の私たちについて理解を深めるためには、地理的な見方・考え方を働かせて空間認識を育て、歴史的な見方・考え方を働かせて時間認識を育て、そうした空間認識、時間認識を踏まえ位置づけて、「今、ここ」の社会認識を育てていくことが重要である。さらに、こうした社会認識を育てるのと同時に、そうした社会認識を培うことで現代社会の課題を発見し、平等で公正の視点から現状を変革していくために問題発見解決能力を育てていくことが求められる。パースペクティブには、こうした現状を理解する社会認識とその現状を変革していく問題発見解決能力の側面がある。

### ③パースペクティブを育てる授業づくりのポイント

パースペクティブ(見方・考え方)を育てるための授業づくりのポイントとして、例えば、次の4点を挙げておきたい。1つ目は、実生活や実社会を生き抜く力をつけていくために、主体的・対話的で深い学びにしていこうことである。2つ目は、大きな概念の同定と活用をすることで、社会をみるレンズの精度を上げ、社会認識や問題発見解決能力を高めていくことである。3つ目は、探究を促す学習活動で、学修を、探究の理論にしたがい、「問題的場面」に始まり「解決された場面」で終わる反省的な活動にしていこうことである。4つ目は、パースペクティブを培うような深い学びにするために、ツーリストアプローチから反省的アプローチへ学びを転換していきこうことである。

## (4) 日本型多文化教育の類型

授業づくりについては、多文化社会、マジョリティ性を知る①マジョリティ性への気づきと理

解、多文化の掘り起こしや文化的障壁の見える化を図る②マイノリティの物語の発掘、バリアフリーからユニバーサルデザインへと展開させる③新しい日本の物語の再構築といった類型を設定する。これらの類型に従い、異文化間能力を育むために、上述したようなさまざまな学びの工夫をしながら、授業がデザインされることになる。具体的な実践例については、松尾（2023）を参照されたい。

提案4. 批判的多文化主義（ジャズ）を理念に、すべての学習者を対象に、多文化市民の育成をめざし、学校全体を改革するアプローチとする。

提案5. 異文化間能力：知識（自文化、他文化、社会・世界）、スキル（批判的思考、コミュニケーション、傾聴）、態度（思慮深さ、寛容・共感、主体的参画）の育成をめざして、①学力をつける、②多様性を伸長する、③多文化社会で生きる力を培う。

提案6. カリキュラムフレームワーク（手順：①異文化間能力の定義、②構成要素（知識、スキル、態度）、③日本型多文化教育の目標と内容、④ルーブリック）を作成する。

提案7. 学校レベルのカリキュラム（手順：①学校目標の設定と共通理解、②カリキュラムのデザイン、③条件整備のデザイン、④カリキュラムの評価と改善）、授業レベルのカリキュラムのデザイン（①学習者の実態を把握する、②単元の目標を設定する、③教材を選択・開発する、④学習活動を組織する）を実施する。

提案8. 授業づくりにあたっては、①同心円的なパースペクティブから多文化・グローバルなパースペクティブへをめざし、②社会認識と問題発見解決能力を育てることを目的に、③ポイントとして、1) 主体的・対話的で深い学び、2) 大きな概念の同定と活用、3) 探究を促す学習活動、4) 反省的アプローチなどの工夫に心がける。

提案9. 日本型多文化教育の類型に従い、①マジョリティ性への気づき、②マイノリティの物語の発掘、③新しい日本の物語の再構築の視点から授業づくりを行う。

## 4 多文化共生を実現していくプロセスをどう考えるか

ここでは、同質性と多様性をどのように考えるのか、マジョリティ性を解明するどんなアプローチをとるのか、また、日本型多文化教育を通していかに多文化共生を実現していくのかなどについて検討する。

### （1）同質性と多様性

日本型多文化教育において、多様性をどのように捉えるのか、異なっているのと同時に同じである私たちの存在を、いかに理解すればよいのだろうか。ここでは、図のように、個人、文化集団、人類の一員といった三重の円として捉えたい。



図 個人、文化集団、人類の一員

一人の人間は同時に、異なる地位や役割、属性をもつことができる。私たち一人ひとり、個人であるが、別の見方をすれば、複数の文化集団の構成員であり、また、人間として人類の一員でもある。私たちは、固有な個人として個性的な存在であり、複数の文化に所属する文化集団のメンバーとしての多様性を持ち、また、同じ人間として共通の特性や課題を有しているといえる。個人、文化集団、人類の一員として、私たちは、独自性と共通性を合わせもちながら、地球や日本という多文化社会のなかでともに生きているのである。

日本型多文化教育では、多様性をこのように理解し、人間としてのまなざし、文化と個人の差異

に応じるまなざし、多文化共生のまなざしを追究していく。

## (2) 多文化共生への社会変革のプロセス

### ①日本人性の概念の拡張

日本型多文化教育についてこれまで、日本人と外国人の軸を中心に、日本人というマジョリティ性がどう機能するかということを検討し、日本人性によって形成され、マイノリティが直面しているガラスの箱を見える化していく課題について論じてきた。

一方で、人を分ける軸は、日本人・外国人といった軸だけではなく、人種・民族、ジェンダー、社会階層、セクシャリティ、障がい、年齢などさまざまにある。では、これらの多様な軸によって生まれるマジョリティ性をどのように考えていけばよいのだろうか。

これらの多様な軸においても、マジョリティとマイノリティといった非対称な関係が存在する。例えば、ジェンダーの軸においても、男性と女性の間でマジョリティ性が機能している。男性というマジョリティ性により同様に目に見えない文化実践、見方や考え方、構造的な特権が形成されているのである。また、人を分ける複数の軸が同時に働いているインターセクショナルリティといった問題もある。日本型多文化教育では、これらの軸についても、日本の物語に女性は含まれているのか、障がい者は含まれているのか、外国人の女性(外国人+女性)は含まれているのかといった形で問題にしていく。

### ②マジョリティ性の解明

マジョリティ性の解明については、文化と構造の2つの側面に着目する必要がある。Omi & Winant(1994)は「人種プロジェクト」という概念を用いて説明している。すなわち、人種主義を理解するためには、人種がいかに社会で表象されているのかといった言説の次元と、人種をもとに社会がどう不平等に構造化されているのかといった社会構造の次元があるとする。例えば、人種と

いうものがどのように語られ私たちに認識を形成しているのかといった言説や言説実践のような文化の次元と人種によってどのような不平等な社会が編制されているのかといった構造の次元は、相互に影響し補完し合いながら機能しているといえる。このような人種プロジェクトは、その他の軸においても同様に、差異のポリティックを通してマジョリティ性が形成される〇〇プロジェクトがあることが推察される。こうした人を分ける軸をはさんで機能するマジョリティ性を明らかにしていくには、文化と構造の両方の側面を解明していくことが求められるのである。

さらに、こうしたマジョリティ性を明らかにしていくためには、マクロ・メゾ・ミクロのいくつかのレベルを問題にしていく必要がある。各レベルにおいて、それぞれの現場で、多文化をめぐるどのようなアクターが存在し、いかなる利害関係者がいるのか。また、各レベルには、どんな目的、価値観、イデオロギー、権力、利害をめぐる一致、不一致、アンビバレンス、妥協などが存在するのか。ミクロ・メゾ・マクロのレベルには、相互にいかに影響を与え合うシステムが成立しているのか(工藤 2019)などの問いに答えて、マジョリティ・マイノリティの軸において、力がどのように働いているのかについて解明していくことが課題になると思われる。

### ③多文化共生へのプロセス

多文化共生へのプロセスとして、1) マジョリティ性への気づきと理解、2) マイノリティの物語の発掘、を促すことで社会認識を醸成するとともに、3) 新しい日本の物語の再構築による問題発見・解決を進めていくことが考えられる。

すなわち、多文化社会についての理解を深めるとともに、マジョリティの視点から主流集団を中心としたどのような言説が実践され、マジョリティ中心の社会構造がいかに構築されているのかといった1) マジョリティ性への気づきと理解を促す。

また、日本人としてのマジョリティ性のもとの



沈黙させられてきたマイノリティの多様な物語を掘り起こすとともに、いかなる文化的な障壁を経験しているのかを明らかにする2) マイノリティの物語の発掘を促す。

さらに、マイノリティの特別なニーズを克服するバリアフリー化、さらに、日本の物語は、多文化の視点から新たな物語として語り直し、不平等な社会構造を、より公正で平等な社会への変革していくユニバーサルデザイン化といった3) 新しい日本の物語の再構築を試みていくのである。

### (3) バリアフリーからユニバーサルデザインへ

ここでは、新しい日本の物語の再構築について、バリアフリーからユニバーサルデザインへのプロセスを示すとともに、そこで生成される多文化共生空間の特質について検討したい。

#### ①学級から学校、さらに社会へ

新しい日本の物語の再構築においては、多文化共生をつかっていくプロセスを以下の枠のように、バリアフリーからユニバーサルデザインへという形で考えたい。

#### 多文化共生へのプロセス

- |  |
|--|
| <p>1) 学級のバリアフリー化:マイノリティの特別なニーズの把握と支援</p> <p>↓</p> <p>2) 学級のユニバーサルデザイン化:つまずいているすべての個人への支援</p> <p>↓</p> <p>3) 学級から学校、さらに社会のユニバーサルデザイン化:個人のニーズに応じた配慮・支援、多様性を尊重する文化の醸成</p> |
|--|

まず、マイノリティの特別なニーズの把握と支援を進める1) 学級のバリアフリー化、そのニーズをつまずいているすべての個人への支援に転換する2) 学級のユニバーサルデザイン化を進めていく。こうした個人のニーズに応じた配慮・支援、多様性を尊重する文化の醸成を図っていくこと

で、3) 学級から学校、さらに社会のユニバーサルデザイン化を進めていくのである。学校レベルでのバリアフリーからユニバーサルデザインへの展開を、学校、さらに社会レベルへと広げていくのである。

#### ②ユニバーサルデザインとしての多文化共生空間の創造

このようなユニバーサルデザイン化された多文化共生空間は、3つの特徴をもつ。

第一の特徴は、すべての個人の学力が保障される空間として、マジョリティとマイノリティの違いに関わらずとも効果的に学ぶことのできる場であるということである。第二の特徴は、異なる文化を学び合う空間として、マジョリティとマイノリティがともに異なる文化や経験を互いに学ぶ場であるということである。第三の特徴は、新しい知識を共創する空間として、多文化での学び合いは、創造やイノベーションを生み出していく場であるという可能性を秘めるものでもある。こうした多文化共生空間は、マジョリティとマイノリティの2項対立を超えた場であり、異なる者がともに学び高め合う第3の空間を創出するものである。

提案 10. 私たち一人ひとり、個人であり、文化集団の構成員であり、人類の一員でもある共通性と多様性を併せもつ存在として捉える。

提案 11. 多様なマイノリティは日本の物語に含まれているのかをめぐって、文化と構造の側面から、ミクロ・メゾ・マクロのレベルにおいてマジョリティ性がどのように機能しているのかの解明をめざす。

提案 12. 多文化共生のプロセスとして、学級においてマイノリティの文化的障壁のバリアフリー化、すべての子どもの視点からユニバーサルデザイン化を図り、それを学級から学校、さらに社会のユニバーサルデザイン化に広げていく。

提案 13. ユニバーサルデザインとしての多文化共生空間 (①すべての個人の学力が保障され、②異なる文化を学び合い、③新しい知識を共創する空間) を創出する。

## おわりに

多文化共生を実現するカギは、マジョリティの意識改革にあるという考えのもと、日本人というマジョリティ性を問い直す日本型多文化教育の考え方や進め方について検討してきた。白人研究を手がかりに、日本人性という概念を設定し、日本人という中心を問い、マジョリティの目に見えない文化実践、見方・考え方、構造的な特権を明らかにしていくとともに、これまで沈黙させられてきた多様なマイノリティの声を掘り起こす作業を進め、新しい多文化な日本の物語を再構築していくといったプロセスについて考えてきた。日本型多文化教育の検討を通して問題提起してきたのが、以下の枠に示す13の提案である。

このような日本型多文化教育の理論と実践を進めていくことで、インクルーシブな多文化共生空間を生み出していくことが期待される。それは、すべての学習者の学力を保障し、異なる者同士が学び合い、知識社会に求められる創造力やイノベーションを育てていくといった協働的な学習空間の創出といえるものである。さらに、こうした多文化共生空間を拓く学級での教育実践を、学校、社会へと広げていくことで、異なる人々がともに生きることのできる多文化共生社会の実現をめざしていくのである。

移民時代という多様性と教育を考える第2ステージを迎えた今、違いに関わらずだれもがおりのままに生きられる社会をつくっていくためにも、マジョリティの変革を促す日本型多文化教育という本格的な教育改革が求められているように思われる。

### 日本型多文化教育で提案すること

1. なぜ、今、日本型多文化教育なのか  
提案1. 移民時代の到来（第2ステージ）という絶好のタイミングに日本型多文化教育を導入
2. 日本型多文化教育の理念と中心的な課題とは  
提案2. 基本理念としてのジャズとしてイメージされる批判的多文化主義

提案3. 中心的課題としての日本人性の問い直しによる多文化共生の実現

3. 日本型多文化教育の枠組みとは

提案4. 批判的多文化主義（ジャズ）を理念とし、すべての学習者を対象に、多文化市民の育成をめざし、学校全体を改革するアプローチ

提案5. 異文化間能力の育成をめざして、①学力をつける、②多様性を伸長する、③多文化社会で生きる力を培うことが目的

提案6. カリキュラムフレームワーク（①異文化間能力の定義、②構成要素（知識、スキル、態度）、③日本型多文化教育の目標と内容、④ルーブリック）の作成

提案7. 目標を設定し、学びの経験をデザインする学校レベル、授業レベルにおけるカリキュラムのデザイン

提案8. ①多文化でグローバルなパースペクティブをめざし、②社会認識と問題発見解決能力を育てることを目的に、③授業づくりのポイントとしての1) 主体的・対話的で深い学び、2) 大きな概念の同定と活用、3) 探究を促す学習活動、4) 反省的アプローチ

提案9. 日本型多文化教育の類型（①マジョリティ性への気づきと理解、②マイノリティの物語の発掘、③新しい日本の物語の再構築）の視点からの授業づくり

4. 多文化共生を実現していくプロセスをどう考えるか

提案10. 個人、文化集団の構成員、人類の一員としての共通性と多様性をもつ存在としての私たち

提案11. マイノリティは日本の物語に含まれているのかをめぐり、文化と構造の側面での、ミクロ・メゾ・マクロのレベルにおけるマジョリティ性の解明

提案12. 学級でのバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化を図り、それを学級から学校、さらに社会のユニバーサルデザイン化に広げていく多文化共生のプロセス

提案13. ①すべての個人の学力が保障され、②異なる文化を学び合い、③新しい知識を共創するユニバーサルデザインとしての多文化共生空間の創出

参考文献または引用文献

- 加藤幸次 (1993) 「価値多元社会」 石坂和夫 (代表編集者) 『国際理解教育事典』 創友社、pp.32-35.
- 工藤和宏 (2019) 「政策的視点からの異文化間教育研究の意義と現状」 異文化間教育学会編 『異文化間教育』 第 49 号、pp.12-26.
- 塩原良和 (2012) 『共に生きる—多民族・多文化社会における対話』 弘文堂.
- 松尾知明 (2007) 『アメリカ多文化教育の再構築—文化多元主義から多文化主義へ』 明石書店.
- 松尾知明 (2010) 『アメリカの現代教育改革—スタンダードとアカウンタビリティの光と影』 東信堂.
- 松尾知明 (2011) 『多文化共生のためのテキストブック』 明石書店.
- 松尾知明 (2013a) 『多文化教育がわかる事典—ありのままに生きられる社会をめざして』 明石書店.
- 松尾知明編著 (2013b) 『多文化教育をデザインする—移民時代のモデル構築』 勁草書房.
- 松尾知明 (2015) 『21 世紀型スキルとは何か—コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較』 明石書店.
- 松尾知明 (2016) 『未来を拓く資質・能力と新しい教育課程—求められる学びのカリキュラム・マネジメント』 学事出版.
- 松尾知明 (2017) 『多文化教育の国際比較—世界 10 カ国の教育政策と移民政策』 明石書店.
- 松尾知明 (2018) 『新版 教育課程・方法論—コンピテンシーを育てる学びのデザイン』 学文社.
- 松尾知明 (2020) 『「移民時代」の多文化共生論—想像力・創造力を育む 14 のレッスン』 明石書店.
- 松尾知明 (2021) 『多文化クラスの授業デザイン—外国につながる子どものために』 明石書店.
- 松尾知明 (2023) 『日本型多文化教育とは何か—「日本人性」を問い直す学びのデザイン』 明石書店.
- Banks J. A. (1994) *Multicultural Education: Theory and Practice (3rd Ed.)*, Allyn and Bacon.
- Frankenberg, R. (1993) *White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness*, University of Minnesota Press.
- Ladson-Billings, G. (2003) *New Directions in Multicultural Education: Complexities, Boundaries, and Critical Race Theory*, In Banks, J. & Banks, C. (Ed.), *Handbook of Research on Multicultural Education (2nd Ed.)*, Jossey-Bass, pp.50-65.
- Omi, M. & Winant, H. (1994) *Racial Formation in the United States from the 1960s to the 1990s (2nd Ed.)*, Routledge.

---

# A Study on the Framework for Japanese-Style Multicultural Education

MATSUO Tomoaki

---

With the advent of the “immigration age” according to the amendment of the Immigration Control Act in 2018, the issue of multicultural conviviality has entered a new phase in Japan. So far, the acceptance of children with ties to foreign children in schools and Japanese language education has been developed as a coping strategy, but as Japanese society becomes even more multicultural, there is a need to shift from the education of foreign children to full-fledged multicultural education.

The purpose of this paper is to present the framework of Japanese-style multicultural education from the perspective of reexamining “Japaneseness” and to make recommendations for education in Japan.

Whiteness studies provides a basis for the

creation of the concept of Japaneseness, which is defined as the invisible cultural practices, ways of seeing and thinking, and structural privileges of the majority. Japanese-style multicultural education re-examines the Japaneseness, uncovers the voices of various minorities that have been silenced, and creates a new inclusive Japanese narrative. By examining such a framework for Japanese-style multicultural education, recommendations are made for Japanese education.

As we enter the second stage of the immigration era, it is necessary to promote educational reform based on the Japanese-style multicultural education in order to create a society where everyone can live as they are, regardless of their differences.